

ひたすら走る中で

中野 理恵



© Bill Gallagher

北部のイスラム系と南部のアフリカ系との間で、長年にわたり内戦状態の続く南スーダン。子どもはさらわれ、家は燃やされていた。本作はそのような状況下を生きぬいた一人の男性、グオル・マリアルを追ったドキュメンタリーである。グオル8歳の時、両親は苦悩の末、息子をひとりで村から逃す決断をする。彼はひたすら走り、野生の果物を売りながら暮らしていたが、武装勢力に捕まってしまう。偶然、出会った幼馴染と共に、ある早朝、逃走に成功。4年間スーダンやエジプトを放浪した末、難民キャンプで保護され、2001年、16歳の時、米国の難民受け入れ制度により、再会した叔母や従妹と共に同年7月に渡米。北東部ニューハンプシャーの高校に入学できた。だが、9人の兄姉のうち8人は戦争で亡くなっていたのである。

高校では、初出場のクロスカントリー大会で5位に。奨学金を得てアイオワ州立大学に進み、2012年ロンドン・オリンピックへの出場資格を取得するが、当時、南スーダンにはオリンピック委員会がなかった。つまり、オリンピック出場への道が閉ざされていたのである。しかもグオルは、自分を難民にした南スーダンの代表としての出場に躊躇があった。結果、IOC(国際オリンピック委員会)のはからいで、特別に彼の個人参加が認められることになり、ロンドンを走り、47位で完走した。本人は勿論のこと、スーダンの人々の喜びはひとしおだった。喜んで踊る人々。

2013年に米国国籍を取得し、20年ぶりに南スーダンに帰国。両親にも再会し、後進の育成に力を注ぐ。だが、次のリオ・オリンピックを目指した彼にさまざまな問題が降りかかる。IOCが彼に拠出した奨学金は南スーダンのオリンピック委員会を通して彼に渡されるはずだったのだが、渡さ

なかったばかりでなく、オリンピックへの出場を認めなかったのだ。それを報告する南スーダンのIOC担当者の嬉しそうな表情に違和感を覚える。嫉妬が背景にあったのだろうか。更にグオルは体調を崩してしまった。だが、彼はくじけなかった。

8歳の子どものが、あてもなく、とにかく遠くへ遠くへと、ひとりで走る。不安だっただろう、何を見、何を考えていたのか。果物を売り日々を凌いだそうだが、それだけで暮らせたのだろうか。一体、どのようにして数年間も生き延びたのだろうか。食べ物や寝るところをどうしたのだろうか。16歳になるまでの間、教育を受けていたとは思えない環境だったのだが、米国で高校に入学し、どのようにして授業についていったのだろうか等々、素朴な疑問が湧く。だが、現にその当人グオルが話し走っている。奇跡のような人生だ。だが、映画製作チームは本作を単純な成功譚にしなかった。走る途中、力尽き道端に倒れ介抱されるグオル、棄権するグオル。完走しても優勝してない。グオルを英雄として描いてない。信念をもつこと、努力することなど、人生にとって何が大切なのかを伝えたかったのではないか。中高生や教師を目指す若者にはぜひ、見て欲しい。

《Cinema Information》

『戦火のランナー』

アメリカ映画(88分) / 監督:ビル・ギャラガー / 6月5日(土)シアター・イメージフォーラムほか 全国順次公開

なかのりえ:映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館,2018)等。